流氷のとどまりたるはかの嗚咽

野本　京

網走の朝。凍りついて開かない窓越しに、ギイギイと喘ぐような音が聞こえた。流氷が擦れ合って軋む音である。どこかで聞いたような気がした。おのれの号泣の嗚咽の音か、生涯に一度だけ聞いた父の嗚咽の叫び声だったか、今となっては定かではない。

昭和五十八年作